

## 翻刻と紹介「廻文之俳諧」

本稿は、廻文俳諧集「廻文之俳諧」一冊を翻刻紹介し、若干の私見を加えようとするものである。

翻刻にあたっては、次のような点に配慮した。

- 1、翻刻の各行は原典の各行の字数に従い、丁数は、「一オ」、「一ウ」の如く示した。
- 2、翻刻に当たって、原形を残すため、異体文字、変体仮名は原字をそのまま用いることに努めた。
- 3、書中に施されているカタカナのルビはそのまま残した。
- 4、虫入りのため難読の箇所は「虫」とし、推定できるところは右側に平仮名で示した。

△翻刻▽

廻文之俳諧

宇口

表紙

(白)

表紙裏

小瀬 渺 美

長き夜能十の睡り能皆目さめ波

乗り舟の音能よき哉 と聖徳太子

能廻文歌より連俳尔も又学ひ

ぬれ者一个能奇格と盤成れりと

なん 屋つ可連多年古れを綴る尔

心も詞も互能碎けしを患ふ

さ盤と捨んも腹ふくるゝ尔似多

連者五六葉尔筆能跡して終尔

童能笑ひも見てんと 安永三年能

弥生 自ラニ云

越新泻

石昌庵 宇口

一ウ

春

眺望し盤延し西日能者しめ哉

水中盤雇ひ能人や若菜つミ

梅遠く月も香も来つ句を留ん

馬士乗る八志累も苦もなし春の駒

憂さ樂さ留主居変春る桜草

賤つらし春も積る盤志らつし

七句を賀春

永き日を庭常住トコトム尔老木哉

行脚を止め

先あくな鳶低う啼く吾妻

越路能弥生

消る此浜や外山盤残る雪

夏

中盤川岸盤けハしき若葉哉

田盤月可橋て立てし盤燕子花

白鷺よ熨せ者羽盤瀬能能き晒

存命ナカラハん気盤此強きむハラ哉

須マツ广坪を月尔見尔来つ沖鱈

高ミよきも岸涼しきも清見冴

山辺能古城

杉と外堀跡魏々と有り時鳥

小娘無き日

繩張ナハリ待て我築く塚盤手鞠花

昼寝能絵讚

合歡咲間捨て居て出須馬草舟

秋

長き葉能荻なと無きを野分哉

乞ヒツと立ッ鎧能岡よ津多と月

木啄能覗きつ木曾能軒続き

苦をのけ多軒あり秋の竹の奥

白菊よ葉も志ら霜盤欲氣らし

石間さ春渡しや下盤冷し以

朋を吊らひ

蘭能香盤残り介り此墓能村

醫能門弟に

名可もりて草の香の咲く照りも哉

貧家能暮秋

三才

二才

二ウ

三才

四才

蟋蟀も路し路カも摺り切りき

冬

半地を掃し気色盤落葉哉

高岸や冬木垣ゆふ屋しき方

飛入リとや鯁を猶くふ宿り人

流付く銀山寒き崩れ可那

来多館盤賑ハし脇尔鉢多々き

利泻しと悦ふ頃よ年木売

農夫を尋年

悉古以多下道見多し大根引

若き隠居へ

増春文可出て反古く可紙ふす満

帰参を送て虫

天能地の鏈添ふ雪車や野路能供

五才

歌仙行

水無月を間日や低き沖つ波

穢春素肌て出多盤涼陰

賑や可盤軒能榎の若やき尔

行くも山厩も高く

以つも更け立待まち多けふも終

草折□多茸可りを裂く

五ウ

出シ菜ても取る秋有ると毛てなして

此地を借る盤遥乳母能子

宮も宮寒さも寒さ闇も闇

妹ナクむやつれももれつ疾む多年

米有りと咄し能品盤取りあへ須

帰参も延多旅能門ン先

篠も篋も葉よき月夜ハ毛のくし

泻遠虫し鳴能音高

六才

辻堂へ相撲尔ふま春俵出しつ

端そりも兀多だけハ盛り蕎麦

嵯峨能名ハ尽須せ過つ花能可マざ

亭尔籠る盤春も暮尔居て

雪照つ多後東風く能立て消ゆ

積ミ銕る紫者しる坂水

飛フ方盤色よき鎧籠可婦登

縁を究めしハ祇園会

六ウ

公事勝ツ盤軽しシ譏る可者つ可しく

暫し盤乾く楸の橋く

木枯のふとつて津どふ首長駕籠

夕鐘六つつ包む音可冬

苦を置盤粘固る屋り能箔多く

理屈とく師可かしぐ陶子

眠り間と月尔瀬尔固つ泊り舟

嶋さ春影可影可春さまし

柚味嗜くふ寺盤替らで福そ見ゆ

板挽可て檜能伸で買ひ多以

乳尔小牛抱て寝て居多十五日

野守可荷繩畏尔借り物

村納屋も花見住みな者身屋ならん

津々しさしつゝく

七オ

京寺町二条下ル 橋屋治兵衛板

七ウ

裏表紙表 白

裏表紙裏 白

### △解説と私見▽

本書はタテ二十二・七センチメートル、ヨコ十五・九センチメートル。いわゆる菊版。糸綴。本文七丁。これに表紙を付したさやかなものである。表表紙中央にタテ十七・七センチ、ヨコ三・二センチの和紙題簽を貼布、題簽には、「廻文之俳諧 宇口」とある。

筆者は序文末尾により、越後新潟の石昌庵宇口とあり、「安永三年（一七七四）夏ごろまでには刊行されたものと見られる。午能弥生自ラニ云」と見られるところから、新潟の俳人宇口により、安永三年（一七七四）夏ごろまでには刊行されたものと見られる。

書肆は、京寺町二条下ルの橋屋治兵衛の板である。柱刻は各丁の背上部に「回」下部に丁数を刻している。

構成は二丁表より五丁表までは発句、五丁裏から七丁裏にわたつて歌仙一巻が収められている。

まず発句を四季に分け、春夏秋冬各九句を収めている。

発句は、各季最初の句を挙げると、

眺望しは延し西日のはじめ哉

中は川岸はけはしき若葉哉

長き葉の荻など無きを野分哉

半地を掃し気色は落葉哉

の如く、すべての句が回文となっている。

次いで、

水無月を聞日や低き沖つ波

を発句とする独吟歌仙一卷を収めている。

本書の著者は新潟の俳人であるが、序文に

「やつがれ多年これを綴るに、心も詞も瓦の砕けしを患ふ」

とあるように、著者自身の長年作りためたものを一書としたものであり、出版も幕末のものであって、さして珍しいものとは言えないであろうし、廻文という性格から、とかく難解なもの、内容も平凡で俗に傾いたものであることは否定できない。

「二花三月」といった歌仙の式目は一応踏まえているものの、句の内容や付けの技巧には、廻文の制約に妨げられてか、次元の低い句が目だつようである。

例えば長句では、

宮も宮寒さも寒さ闇も闇

雪照た東風く能立て消ゆ

短句では、

行くも山厩も高く

島さす影か影かすさまじ

津々しさししつゝく

などに見られるように、苦しまぎれのことばのつじつま合せに終っていると思われる句が散見する。

廻文俳諧は回文の文字も用いられ、「かいもん」「かいぶん」双方の読み方が用いられているようである。

廻文俳諧は、まず和歌で行われ、「八雲御抄」に廻文和歌について、

「逆さまにも同じやうに詠まるるなり」

と触れており、これが連歌、さらに俳諧に継承されるのであるが、「奥義抄」に、

むら草に草の名はもしそなはらばなぞしも花の咲に咲くらむ

を挙げているところから、遅くとも十一世紀には和歌の世界ではすでにあまり珍しい存在ではなかったと思われる。

本書では序文に、

長き夜能十の睡り能皆目さめ波乗り舟の音能よき哉

を廻文歌の初めで、これは聖徳太子の作として紹介しているが、これは十六世紀末の書「日本風土記」に見られるもので、本書の説は根拠不確かだ論拠を持たない。

廻文俳諧は江戸初期になって石田未得、野々口立圃などの作にも見られるが、本格的な廻文句集としては「水車集」（随流、寛文元年一六六一）を挙げるべきであろう。

先に触れたように、本書は決して珍書とはいえないが、しかし別の立場から見ると、本書の著者が、上方・江戸といった文化の中心

となった都会の人ではなく、新潟という地方都市の、しかもあまり著名でない俳人であること、書肆が、地方の出版屋でなく京都の、しかも俳書出版専門の書肆、橘屋治兵衛の板であることなどを考え合せると、安政期には廻文俳諧が遊びの要素の強いものであったにせよ、あるいはそれ故に文化や政治の中心である京都・大坂や江戸などの地域から遠く離れた越後の地にまで廻文俳諧が広がり、地方と都市とを問わず楽しまれていたことを示すものである。

さらに本書を、恐らく地方都市にも存在していたであろう書肆からの刊行でなく、京都で刊行したことは、地方にまで廻文俳諧が普及し、その地方文化の力がある程度の発言力を持って来ていたことを物語る根拠であることを間接的に証明していると思われることが出来ると思うのである。